



嶺 鶴

令和6年11月1日
大田区南久が原 2-17-1
電話 (3750)2260
FAX (3750)2280

なぜ、問いをもつことが大切なのか

大田区立東調布第三小学校
校長 並木 昭

先月12日（土曜日）の学校公開におきましては、多くの保護者・地域の皆様に本校の教育活動の一端を御覧いただきました。この場をお借りして深く感謝を申し上げます。

さて、今、「なぜだろう？」と思っていることはありますか。また、それらの疑問は、自分にとって、①関心の高いことですか。②関係性の深いことですか。③緊急性の高いことですか。

さらに、上記の①～③は「自分にとって」に限らず、「家族にとって」「職場や学校にとって」「地域社会にとって」「我が国にとって」「人類全体にとって」と拡張されることもありましょう。

ここで一つ、問題提起をしたいと思います。それは、次のとおりです。

「日頃は気にも留めずに過ごしている事柄から疑問点を見出すことは可能でしょうか。」

例えば、「なぜ、自動販売機は、お金を投入してボタンを押すと、欲しい商品が出てくるのか。」といったものです。

「疑問」は、「問い」として捉え直すことで探究の対象となり得ます。前述の例を次のように置き換えると、問いとして捉えることができます。

（工学的な問いの例）「自動販売機にお金を投入してボタンを押すと商品が出てくる仕組みは、どのようなになっているのか。」

（文化論的な問いの例）「自動販売機は、どのようないきさつで、お金を投入してボタンを押すと商品が出てくる仕組みとなったのか。」

工学的な問いの場合には、「まずコインの種類を判別する装置があって……」となり、文化論的な問いの場合には、「そもそも商品や切符は、みな手売りだった……」という探究の過程が考えられます。

「問い」に翻訳された「なぜ」に突き動かされて探究する過程では、その探究の仕方の良し悪しを振り返ること（省察）も重視されます（＝省察的探究）。同時に、答えを得られない不安とともに生きることも、また重要です。十分な理解に至らない事柄があっても、それを一旦認める姿勢を取ると、本質的な理解に至ることがあるからです。

例えば、「なぜ、分数の割り算は、分母分子をひっくり返した掛け算で計算できるのか。」について答えられなくても、その方法論を認め、計算に慣れることで、逆数の概念などを理解していくでしょう。

こどもは、日々の生活の中で、多くの「なぜ」を見付けます。時に大人が答えに窮するような疑問も見付けます。

「こどもから『なぜ』を投げかけられた大人は、どう応じればよいか。」

知識伝達のみでよければ、答えを伝えることで完結しますが、ほかにできることは無いでしょうか。授業は、その「知識伝達だけではない応答」の典型であると言えます。

なぜ、問いをもつことが大切なのか。それを問い続ける学校でありたいと考えます。